

大山と三瓶

目次

大山

大山に登る道 一
 大山驛より登山する注意 二
 御來屋驛より登る道路の注意 二
 大山の地質 七
 大山周囲の地貌及其噴出の時代 三
 大山寺の歴史 五
 阿彌陀堂及其佛像 七
 成盛地藏菩薩を寄進す 三

三瓶其壘と村物分布の關係 三
 三瓶山の噴火 三

大山寺と源盛	三
下山明神	三
大山寺と尼子氏	三
大山寺の寶物	三
御山に登る道路及植物の分布	三
大山の寒帯植物	三
大山にある高山の御花畑	三
御山の眺望	三
朝日を見る目的の大山	三
大山の杉林と動物	三
大山の氣候	三

大山の詩歌	三
大山と畫題	三
三瓶山	三

三瓶火山調査の歴史	六
三瓶山の地形	六
三瓶山の噴火及變動の歴史	六
三瓶山の噴出と其周圍地貌との關係	六
三瓶火山の構造	六
三瓶地質と植物分布の關係	六
三瓶山の噴火	六

火山学と原産 三

火山の種類 六

志學温泉 八

第一圖
大文及其周圍圖



大山と三瓶

雪吹敏光 著

大山

大山は、海内の名山にして、中國隨一の高嶺なり。其最高峰たる御山に於て、實に五千六百餘尺の高度を示せり。此高嶺たるに於て既に登攀すべき價值あり。況んや理學上、特に植物分布を観察すべき諸現象、及び史學上貴重なる一千年前の古建築物、及び國寶たる諸佛像あるに於ては宜しく吾人の一遊を試みるべきの絶境たり。

大山に登る道路

大山に登山する道路多からず。東南兩側は斷崖にして道なし。故に南作州よりするものは、徳山又は江尾より大山の西麓を迂廻せざるべからず、西、雲州よりするものは、大山驛より尾高を経赤松村に至るべし。此道路最も可なり。近時新道開通し、自轉車も亦登ることを得るに至らん。東、因伯地方よりするものは、御來屋にて下車すべし。道路稍平坦なれども石礫多し。歩行には敢へて難からざれども、車馬は通せず。

大山驛より登山する注意

今や汽車の開通と共に、登山の士、年を逐うて多かるべく、之等の人士

の爲めに、最も便利なる道程は、東西何れの遠隔の地より來るも大山驛にて下車し、赤松道路を採るに若くはなし。但し名和神社にも參詣せんとする人は御來屋驛にて下車するを可とす

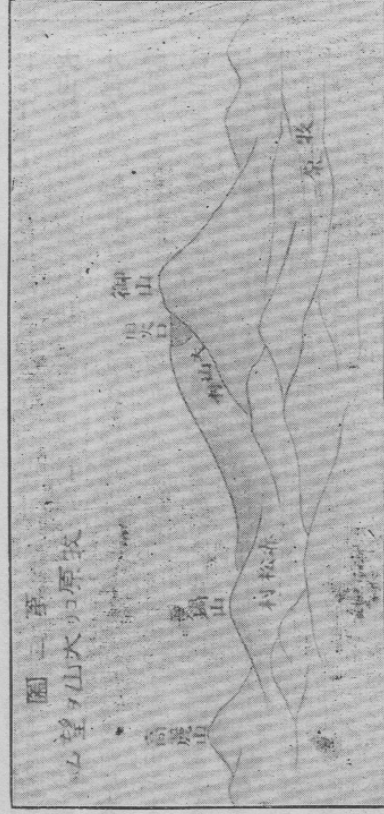
大山驛を出でて南に向ひ、田圃の間を行くこと二十町にして尾高に至る。

小邑なり。郵便局あり、菓子果實等を鬻ぐ店數軒あり。尾高の西に大山神社あり、大山驛と尾高との間に馬車の便あり。大山驛より大山寺までは三里半と稱するも實は四里あらん。普通の歩調にては五時間を費やす。尾高を東に向ひて進めば岡成に至る。岡成は洪積層の地にあり、丸き石礫の層高くあるは即之なり、岡成より南に曲り、小溝に沿うて行くこと十數丁、溪流ありて松林を遶る。水は潺湲として清し。谷深きにあらざれども、山氣冷然として肌を犯す。此道路の左側溪流に沿うて、大形の羊齒なる「コモチシダ」あり。葉裏より不定芽を出す。植物群は平地と甚

しき相違なし、盆栽に供するセキシヤウなど自生する處あり。春には、ヤマツツジ、シヤウトハカマ、秋にはヲミナヘシ、キハギなど百花撩亂の美を競ふ。

此處までは凡べて暖帯にして、遠く望めば、青松は芹の如く、道は絲の如し。淡々たる赤松の輕林を出づれば、稍明き河原に出づ。大小の石礫谿間を滿たす。之は佐陀川にして、流れて尾高を遶るものなり。此河原には、オキナクサ、マツヨヒクサ、クソニンジン、アキグミ、ノイバラなど混生す。かゝる所は凡べて下部河原帯と云ふ。

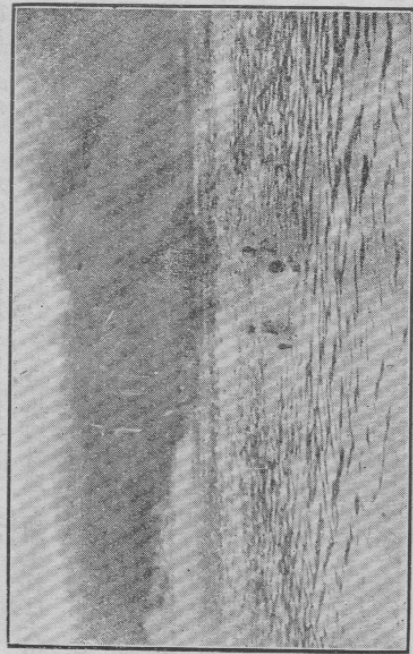
下部河原帯の植物は、葉の表裏毛茸を帯びたるもの多く、爲めに白色の觀を呈す。蓋し葉片は屢々水に浸さるゝにより、濡れざらしめん爲めにかゝる毛茸を以て葉の氣孔を保護する装置に外ならず。此下部河原帯は



平時は乾燥甚しき礫地なるも、雨あれば水は漲りて河と化し、植物群は多く水に埋めらるゝにより、普通のもの、發生に適せず。比較的水に強く、且つ水を防く装置ある植物群のみ多く繁殖したるものなり。

下部河原帯の小景を狭みて新舊の道路あり。舊道は河原の西、丘陵の上にありて稍急なり。此丘陵は、大山の牧原の東側にして、頗る廣漠たる荒野なり。新道は東に延び、幅廣く蜿蜒として曲ること長蛇の如し。此附近は百米内外の高度なり。下部河原帯を西に見、漸く登れば赤松橋あり、累々たる赭色の集塊岩は切り開かれて、新道は彌急なり。此新道の下、千仞の谿谷には谿流混々として落つるあり。點滴もよく石を穿つ。谿谷は長き年月の間に水の爲めに消磨せられたるものにして、初めは兩崖相連りたる高地なりしも、水蝕消磨の作用によりかくの如く峽谷をな

したるものなり。水の長き作用には、偉大なる工事をなすも、寧ろ此谿谷の如きは、小中の小なるものなり、集塊岩地を彌上れば大山橋あり。數丁にして村邑あり。赤松村なり。農家數屋、北、墓地ある所に出づ。此間を過ぎて東に降れば赤松池あり。舊噴火口なりと云ふ人あり。考ふべきなり。池水は最も濃碧、赤松の樹幹は特に赤く、湖中の風色無雙と稱すべし。水靜かに、山臥する如く、蓋し小中禪寺湖と云ふべきなり。傳へ云ふ。昔松江市外中原に子松と云へる藩士ありしが、其子女大山寺に詣で、歸路池邊を過ぎしに、女は急に籠より降り、池に投して死したり。暫くして此女變して蛇姿に化し池表に現はれたれば、駕輿丁は驚き恐れ、籠を抛棄して逃れ去りしとの俗話を以て有名なり。赤松池より西南に向ひ再び新道に返りて川を渡り、少しく登れば、牧原の北端臥龍の



如き老松蟠屈する所に出づ。仰けば正面に大山の好容突如として表はれ、温然語らんとするものゝ如し。首を回せば牧原は廣漠として一望限りなく、夜見ヶ濱は脚底に出て、形蚯蚓に似たり。島根半島は東西に翼を張りて蝙蝠の如く、中海は玲瓏たる鏡面をなし、中に大根島、江島は汚點の如くに映す。宍道湖は糢糊として雲烟の如し。

牧原芝生の間にはウシクサあり、夏にはマツムシサウ咲き亂れて紫藍の如し。白色のウメバチサウは點々星の如し。ウシクサの中には最も小形なる寸餘のアキナへありて、夏の頃にのみ白花を開く、此植物は中國にては大山より美作の徳山にまで及べり。

牧原帯の植物は、下部河原帯の植物群とは全然趣を異にし、小形にして乾ける植物のみ多し。蓋し日光は強く照り渡り、風は常に吹き來り、土

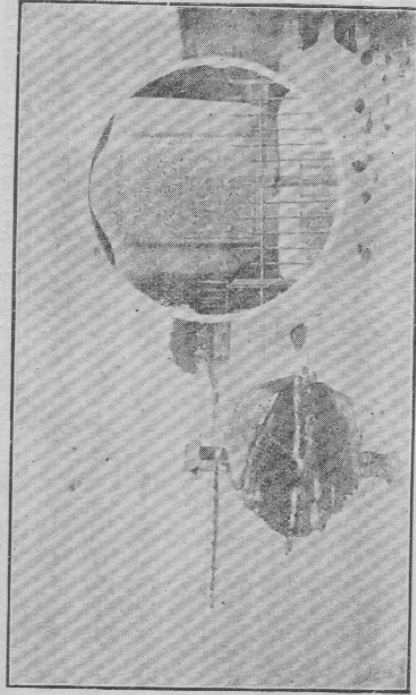
壤は水濕に乏しく、其表面の土層は黑色なるも尺餘にして硬き赭色の粘質土となり、假令雨あるも、土中に水分を含むことなくして流れ去り、一時其表層に水分を含むことあるも烈しき蒸發の爲め直に乾燥するなりされば、地中深く根を下すが如き大形の植物の發生には不適當なり。故にかゝる所にては、耕作又は造林等容易に出來ざるものにして、不毛の荒野として多く放置せらる。只牧場には頗る可なり、大山にはかくの如き山麓の荒野其周圍に滿つ。皆浮石或は火山灰の集積したるものなり。赭色の大道を登ること凡そ一里半にして、牧原の盡くる所に至れば、追分の茶屋あり。夏は水を霽ぐ。尙登ること數丁にして大深林あり。即ち山毛櫨帶なり。集塊岩の上に繁茂す。蓋し集塊岩の層は、極めて粗雜なる火山岩の破片なる、角礫の累々として集積したるものなれば、水分は深く岩層

間に浸入して土中に長く貯滯せらるゝにより、深林植物は地中に根を下して十分に養液を吸收することを得るなり、夫れ故に山毛櫨帶の樹木は姿に繁茂して良材を産し、薪炭の料となる。大山寺は此山毛櫨帶深林の中にあり。

御來屋より登る道路の注意

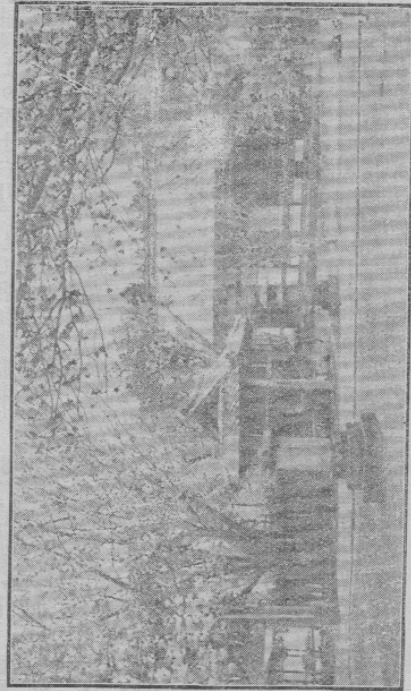
御來屋より登山するものは同驛にて下車し、北に向ひ行くこと七町にして海岸に出つれば御來屋町に至る。町の中央以東、北側道路の一隅に石碑あり。元弘帝御着船處の碑文を載す。海岸に出てなば御腰懸岩ありて儼然海波の上に現はる。

御來屋は人口二千餘の漁村なり。夏期は海水浴場として避暑に適す。御



來屋驛より西十六町にして名和神社あり、別格官幣社なり。社殿の後方には屢々黒色の焦米掘り出さる。長年敵に糧食を奪はれんことを慮り、豫め火を放ち、米廩を焼きたる遺物なりと稱す。社前には大なる馬場あり、櫻樹數百株、花期には觀賞の士絡繹として織るが如く、臨時汽車を出すに至る。

名和神社の南に軍馬育成所御來屋支部あり。多數の軍馬を飼ふ。又大農仕掛の農具多し。此支部より間道を経、高田に出で橋なき阿彌陀川を渡り、坊領より大山原に出づる道路あり。又高田より阿彌陀川の東岸に沿ひ、豊房に出て、川床より登れば、飯戸山と大山の間の峠に出で、大山寺を瞰下する道あれども頗る遠し。名和神社或は軍馬育成所支部より高田に出づる道路は、大に迷ひ易し。黒松林の中に入りて方向不明となり、



困難することあり。殊に此間は人家少なければ不案内のものは寧ろ御來屋に戻り富長より高田に至るを可とす。御來屋より大山寺までは三里半と稱す。阿彌陀川を渡りて坊領に出づれば、溪流は清く、家を抱きて混々流下す。中に多數のバイクワモあり。莖は絲の如く綠色にして食すべし。花は梅に似て白色愛すべし。

坊領の南に佐摩あり、之より大山原に出づ。黒松は粗に茂り、道路石礫多し。此間は暖帯にして即ちクロマツ、アカガシ、ツバキ、エノキ、イボタ等あり、かくの如く樹林は暖帯なるにも拘はらず、水草或は雜草中には山毛櫨帯のもの多し。是最も奇なる現象なり。蓋し樹木の海岸を去ること遠からざるにより、絶えず暖風を蒙り、氣候の調和を得るも、溪流のみは其源を大山に發し常に氷汗は流れて流岸を洗ふものあれば却て



暖地のものは發生に適せず、バイクワモの如き、山毛櫛帯の中にも特に其寒地にある水草の發生を見るに至りしものなり。海岸を距る僅々一二里の間にして、かくの如くに同一地であり乍ら兩様の分布を見るものは、蓋し地形の致す所にして、大に注意すべき現象なり。思ふに本州中央以南の地にはなき事實ならん。大山原は、東飯戸山、西北高麗、鍋山の間夾まれる狭長なる原野にして、植物群は牧原帯と甚しき相違なし。大山原の

諸處に安山岩片の石垣の如きものあり、牛馬の通行を妨ぐるものなり。大山原の盡頭に至れば、樹木は漸く變じて山毛櫛帯のみとなる。イタヤカヘデ、ブナ、ケヤキ、ホ、ノキ、ハリギリ、トチ、ミヅキ等繁茂して深林を形成す。此深林は大山寺の深林と相連り、山麓一帯の地を圍繞す。

大山の地質

大山の赭色或は稍青色を帯びたる岩石は、多く輝石安山岩にして、此中に、白き斑點と黒き斑點とあり。前者は斜長石にして、後者は輝石なり。此外頑火石、安山岩もあり。火山の噴出せし年代に至つては不明なれども、頗る古き死火山なり。御山に登りて東方を瞰下すれば、劍山、釋迦ヶ岳、三鈴ヶ峰、寶珠山等相連りて、中に大なる凹谷あり。此凹谷は、馬蹄狀

をなして北東、奥の院に向つて開く。之れ即ち往時の噴火口にして、爆裂火口なり。恰も盤梯山破裂の時の如く、山體の一部破壊せられたるものにして、蓋此外輪山の諸峰は相連結したるものなりしならんも、今は谿流の爲めに北方の一部は缺壊され、遂に「切り割」の景を印したるものなり。此火口内に山毛櫛帯の深林繁茂す。火口内の上部頂上に近き所には、白檜帯の草本あり。サンカエフ、ウサギキク、エンレイサウ、等イチキ樹下に開花す。稍下部にある河原の中には、ヒメアカバナ、キクバクワガタサウ、タニソバ等砂礫の間に採集せらる。かくの如き、火口内の山毛櫛帯の樹林及び白檜帯の草本は、相合して一の火口帯を形成す。御山の下西北角に方り二箇の小池あり、常に水を貯ふ。其初は主なる火口にして、噴烟せしものならんも、年を経るに従ひ、瓦斯の噴出も止み、

土砂は火口を埋めて、今日の如き小池をなしたるものなり。大山の山麓にはかゝるもの、數多し。

高麗山は、御來屋の南に聳立して海拔七百六十七米を示す。高麗山の南には、鍋山ありて大山と相連り、共に大山山彙の北部支脈なり。大山の東北には、二子山ありて千三百五十八米船上山は九百七十九米なり。皆安山岩より成り、船上山には爆裂火口頗る多し。頂上は平垣にして、之より降ること百五六十米にして、清流ありて熔岩の上を流る。

大山の東には兜ヶ岳あり、千五百六十六米なり。横山は千五百〇一米にして、相共に大山山彙の東部支脈なり。

大山の東南には新小屋峠あり、九百八十八米にして、之より横枕山に連る。高さ千二百十米なり。皆安山岩よりなりて、獨立の火山なるが如し。

大山山麓の原野は火山灰の堆積せる浮石層にして風化して粘土の如くなり。又赤色の粘土層をなせるものあり。或は石礫を混して洪積層をなすものもあり。實に、此山麓の裾野は火山特有のものにして、特に北方及び西南によく發達し、南には笠原、笹ヶ平あり、西には樹水原、水無原、横原あり、北には牧原、大山原、船上原ありて、長野原、高野は尙其北東に延びて廣大なる高原をなせり。

大山は中國山脈とは相分離し、突兀として高峰を峙たしむるにより、其周圍には凡べて輻射狀の谿谷を生せり。此谿谷を貫きて流下する川流の主なるものは、佐陀川、阿彌川、加勢陀川なり。何れも集塊岩の累層を通過するにより、河底は安山岩片の石礫を以て満たされ、上流は常に乾枯して石礫のみ顯はれて河原をなす。中流も亦石片多き荒れ川なり。下

流は細砂に富み、水淺くして舟楫の便なし。長さ二十軒内外あり、北流して日本海に入る。

佐陀川は、其源を大山の爆裂火口に發し、奥の院の西を流れ、大山原及び牧原の間を通過し、高麗山の西赤松村より出づるものと合し、尾高の西を流れて日本海に向ふ。

阿彌陀川の水源は大山の東側阿彌陀岩に發し、船上山と大山との間を流れて激流となり、混々として落ち、坊領附近に於ては其幅廣く彌大となりて御來屋の西に入る。

甲川は船上山に沿うて流れ船上原を横きり、又長野原を貫き北流して下市に出づ。

新治川、名和川共に大山の北麓より出て、前者は御來屋の東、後者は

西に落ちて日本海に入る。

大山周圍の地貌及び其噴出の時代

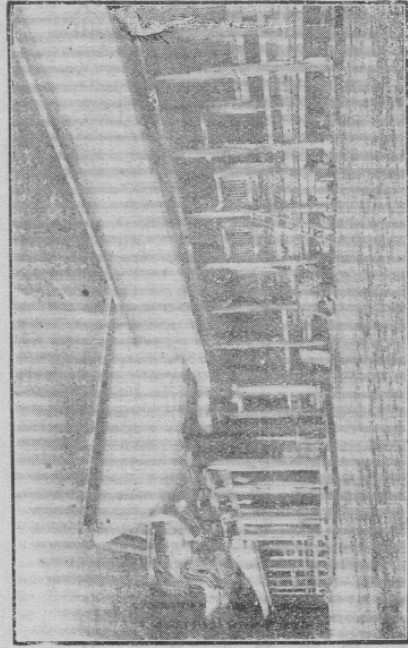
大山の西、米子より岸本までの間は第三紀地層にして、鎌倉山、新山は之を貫ける石英粗面岩の山なり。溝口より江尾までの間は花崗岩地にして、江尾の南僅に石英斑岩現はる。江尾より作州の三平山麓までも亦大なる花崗岩地なり。三平山は石英斑岩と閃綠岩とよりなる。其高さ三千五百尺なり。之より東方一帯の地即美作の徳山の南方は凡べて花崗岩地にして、權現山は其高峰と認められ、高さ千八百六十尺なり。此權現山によりて作州の西北部は全く地盤の相違せる南北兩地に分界せらる。徳山は其北側の窪地にして、有名なるハンザキの産地なり。之より南、釘

貫、小川の間は日本國中他になきハンザキ群分布の所なり。徳山地方は夏期に鮮魚なし。故に此ハンザキを以て無上の食膳となす。著者曾てハンザキ採集の爲め津山より此地に來り、三平山、權現山に登り、又蛭ヶ山連峰にも植物採集の爲めに歩を運びたり。此蛭ヶ山の南麓はシナノキ、フサツクラの密林多かりき。蛭ヶ山も亦大山山彙中に屬し、大山と同じく輝石安山岩よりなり、上中下の三山鼎立するも、上蛭ヶ山最も高く、四千尺の高度なり。美伯の境上犬狹峠より倉吉の東までは凡べて花崗岩地なり。此花崗岩は遂に因伯の境上にある鉢伏山にまで及ぶ。鉢伏山は高千六百尺、花崗岩と輝石安山岩とより成る。倉吉より東郷池を経て泊に至る間は、大山と同系統に屬する輝石安山岩地なり。倉吉の北には僅に玄武岩の噴出するものを見る、著者亦曾て鳥取より徒歩東郷池に來り

同温泉にて一泊し、後美伯の境上峻坂を以て有名なる人形ヶ山を超て四月積雪を踏み、遂に作の奥津に至りて温泉に入り、茲に大山山彙を一周したるの經驗を有す。依りて之を見るに大山山彙は概して其西方には山高からずして森林淺く、以て人文の發達するもの多きに反し、東南兩側は峻峰疊々として交通の便を欠ぎ森林深くして異様の動物の栖所となる。而して又かくの如き大山山彙の噴出をば其踏破したる地貌により考ふるに第三紀の時代なること、凡そ周圍の岩石にても察せらる。大山の絶頂にある特有植物群たるチャボノセキセウ、ヒメアカバナは又其時代につき絶佳の史料を供給するものあり。實に植物の古文書と云ふべく、以て證すべし蓋かくの如き植物は千島西比利亞のフロラにあるものなれば、察するに大山は日本海の陥没前既に噴出したるものなるべし。

大山寺の歴史

大山寺は天臺宗の靈地にして、元正天皇の御代、養老年中金蓮上人堂宇を此地に創立したり。其後貞觀年中延曆寺の慈覺大師は錫を此地に留め、丈六の地藏菩薩を安置し、始めて大山寺と稱したり。本堂及び阿彌陀堂は天承年間の造營にして、其初は方二十四間餘の大堂なりしも、享録年中の洪水に遭ひて破損し、天文六年本堂を再建したり。其後修繕毎に之を縮小したるも、柱梁其他の木材は、凡べて創立當初のものを使用したるにより、實に一千四十年の古建築物と云ふべきなり。境内坪數五千二百十二坪にして、本堂、阿彌陀堂、鐘樓、觀音堂等あり。觀音堂は其創立の年月詳ならず。賽路の左右には、洞明院、蓮淨院、金剛院其外十六



大德山神社の遺蹟、合開其於十六
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工
其遺蹟正于工

の末寺ありしが、維新後、領地は凡べて官有となりし爲め、寺僧は糊口
に窮し、寺院の多くは朽廢して只石垣のみ残り、雜草茫茫として狐狸の
巢窟となる。現に残存せる寺院も宿屋を兼業して生計を立つ。本山の事
務所は洞明院にして、同院には多くの寶物を藏す。其主なるものには龍
鐘、後陽成院宸翰、智證大師自筆目録、慈覺大師着用袈裟、椎の厨子入
彌陀三聖、榎の厨子入千手觀音等あり。

阿彌陀堂及び其佛像

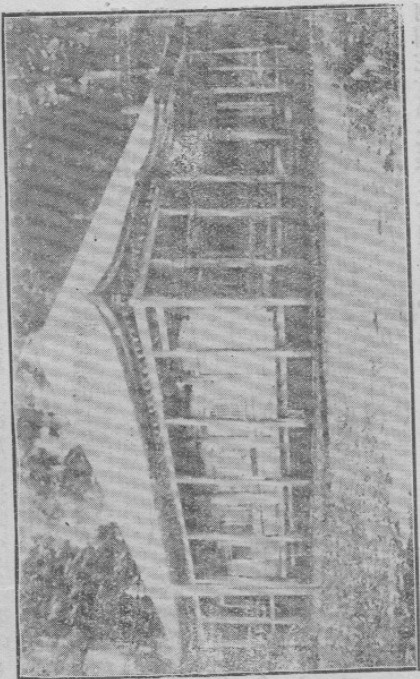
大山に登るものは、必ず阿彌陀堂に參詣し、且つ其佛像をも禮拜すべし。
大山は、山嶺に高山植物の自然の珍あると同時に、此山腹の堂宇は建築
學上人工の粹を集めたるものにして、實に藤原時代に於ける彫刻建築の



美を窺知するを得べくして、史學上注意を拂ふべき主要のものなり。
此堂宇は固、密教修行の道場なりしが、後純然たる阿彌陀堂に改修せし
により、稍古式を損せしの嫌なき能はずと雖、そは一小部分にして、全
般には古式を存するものなり。

堂内に安置せる佛像の内にて見るべきものは、本尊阿彌陀如來及び其脇
士なる觀音、勢至の菩薩にして、清和天皇貞觀七年、慈覺大師彌陀經を
傳へられし以前、既に鎮座ありしと稱するも、高村光雲、岡倉覺三氏等
の説には藤原時代の作に係るものなりと。此本尊阿彌陀如來は丈六の阿
彌陀と稱す。實は全長九尺二寸膝張七尺一寸一分、厚さ一尺二寸、臂五
尺九寸、後光一丈五尺、臺坐五尺五寸なり。

阿彌陀堂の北縁に古鐘あり、龍鐘と名づく。全面磨滅して損じあり。縦



横の紋様等より見れば、其製作は、蓋し一千年以上を經過せしものなるべしと。

成盛地藏菩薩を寄進す

成盛は伯耆の豪族にして源平二氏衝争の際、伯耆會見郡の東部を開拓してこれを領す。其先は紀長谷雄に出づ。長谷雄は寛平延喜の際文學を以て聞ゆ。長谷雄の後に致頼あり、伯耆守に任せらる。蓋成盛は其後裔にして、當時富強州に冠たり。是より先、承安元年七月廿八日、大山寺堂上するや、大智明大權現地藏菩薩も亦其災に罹る。茲に於て一山の僧侶相議し、造營を成盛に謀る。承安二年、成盛金銅の地藏菩薩及び厨子を鑄造し、又寶殿をも築造し、同三年八月廿二日遷宮式を擧ぐ。地藏尊は

兩度の災厄に罹りしも、優美なる容姿猶残り、温然依らしむべく儼然犯すべからざる偉大の作品と稱すべきものなり。

鐵製厨子の火災にかゝりしは、初めは天文廿三年三月廿四日にして、後は寛政八年三月廿四日なり。圖は四枚ありしも、寛政の災其一枚を缺損するに至りき。殘餘の三枚も亦剝離甚しく、字體は明瞭なるも讀むに難く、其記録は以て史乘の缺を補ふに足るものあり。

大山寺と源盛

信濃坊源盛は村上行高の第九子にして、長年の弟なり。大山寺に入りて別當となる。長年後醍醐帝を奉して船上山に據るや、源盛は大山寺より同宿二十四人を率ゐ自ら其長となりて之に應せり。長年愈々義旗を擧ぐ

るに及び、七百餘の兵士大山寺より來り集まる。船上山は當時大山の末寺なりしにより、源盛は同山の山僧に命じ、帝の供御最も努むる處ありき。既にして賊軍來襲するや、兄助高と共に佐々木清秋の軍に方り、奮戦して之を退く。後源忠顯に従ひ六波羅の軍に効あり。長年戰役後、楠、北畠氏等と共に王事に勤む。延元四年三月、肥後八代城に居り、菊池氏等に從ひ恢復を計りしが、正平十三年十二月十三日、八代城に於て卒したり。時に年五十有六、朝廷其功を追賞し、明治廿二年祭資料一百圓を大山寺に下し給ふ。實に源盛が大山寺の別當より出で、王事に勤めしことは、大山寺歴史中の最も美談と稱すべきものなり。

下山明神

大地明權現地藏菩薩につぎて有名なるものは、下山大明神なりとす。之は大智明權現の末社なり。其神體として祀れるものは十一面觀音にして、高さ一尺、銅製のものなり。文和元年地中より發掘したるものなりと。此下山明神の控佛として聖觀音あり、高一尺一寸、天平時代の作なりと。何れも威容端然圓滿の相貌を具ふる佛像にして、國寶となれるものなり。其他十一面觀音なるもの二體あり、一は安政年間の火災に罹りて兩手缺損す。平安初代の製作ならんと。一は箔金佛にして、製作の年代は六七百年前なるべく、兩種共高村氏來觀の後、國寶となりしと云ふ。

大山寺と尼子氏

天文二十三年三月廿四日大山寺炎上するや、本尊たりし地藏尊も亦燒損

す。晴久一族と計り之を再興せんと欲し、其臣多賀對島守を作事奉行となし、自ら願主となりて本社を造營したり。晴久の長子は神體を鑄造し、二子は龍王の像を刻し、三子諸將各造工するもの多く、翌二十四年即弘治元年十月二十八日竣工し、茲に遷宮の式を擧ぐるに至れり。大山寺の再興は全く尼子氏の力によるものなり。然るに尼子氏は數代にして亡滅し、毛利氏代つて山陰道を經營するや大山寺の衆徒は遂に毛利氏に歸し、欸を吉川元春に通するに至る。毛利氏も亦大山寺の修理に盡したること、は古文書によりて略々之を知ることを得べし。

豊臣氏の代に至つて、大山寺の領地は返上せられしが、徳川氏の時に方り、即慶長年間大山寺の僧侶に豪圓と云ふものあり、上書して大山寺の由來を陳する所あり、爲めに朱印三千石を下賜せらる。故に大山寺にて

は、豪園僧正を以て中興の祖となして之を仰く。明治維新に至り、大山寺の領地は悉く返上せられ、山は今官有たり。

大山寺の寶物

大山寺の寶物は、收めて本山事務所なる洞明院にあり。丈六彌陀尊は阿彌陀堂にあれば就きて見るべし。佛像には國寶となれるもの數多し。金銅地藏尊は承安二年の作なり。厨子あり、銅色に錆びたり。刻する所の銘の書は、頗る遒勁高雅にして、米芾の法徽明の筆に類する所あり。丈六彌陀三尊は貞觀七年の作にして、阿彌陀堂も亦特別保護建造物となり。下山地佛なる十一面觀音の三尊及び中山觀音本尊たる金銅正觀音は、相共に國寶たり。凡そ佛像を見るものは只高古にのみ眩する勿れ。實に

其慈相柔和にして威嚴を保ち、深仁至愛の徳容具はり、風貌人界を超越したる作品にして價あるものなれば、觀者此明ありて國寶は彌光を増すなり。器物には慈覺大師の所持と稱する錫杖、袈裟、法螺あり。實盛作劍及び阿彌陀川より上りしと云ふ龍鐘あり。鬼牙と稱するものは、化石にして、アラザメ類の齒なり。鹿の大角と稱するものは、日本産のものならざるが如し。書には後陽成天皇御宸翰、日光宮公辨親王の筆になれるものあり。尊圓法親王の溫雅なる書もあるあり。同親王の筆はよく各所に見らる。書には寺院の常として佛畫最も多し。特に着彩の鮮妍なる佛像の畫あり。中にて最も秀でて價あるものは實に雪舟筆文珠普賢の双幅なり。夫れ邦畫の貴ぶ所のものは、主として描線と墨色とにあり。觀よ、其全幅擧げて筆致は剛健にして万斤の力あり。潑墨淋漓として畫風

堂々たり。而して其人物の風貌姿態は、高邁清遠の氣眉宇の間に溢れて、崇敬の念禁する能はず。落款はなきも、雪舟たるに違はず。唐馬遠の三幅對は畫は可なれども時代新し。金岡の如きは考ふべきものなり。雪信安信の畫の如きは隨所にありて弊履の感あり。

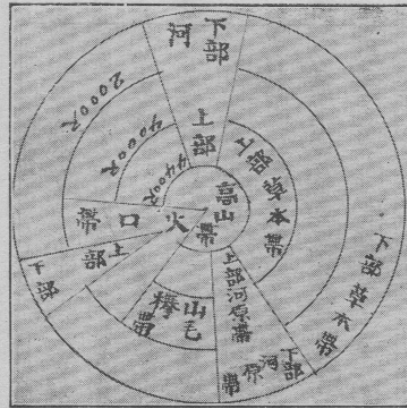
御山に登る道路及び植物の分布

大山寺より御山の頂上に至るには普通三時間内外を要す。御山を降りて寺院に達するには一時間半内外を要す。夫れ故に、朝は成るべく早く起き出て、大なる江尾街道を西に向ひて進み、暗く繁茂せる山毛櫨の深林を通行すべし。登山者は宜しく山毛櫨帯の深林はかくの如き状態なることを深く注意すべし。ブナ、イヌブナ、ケヤキ、オホナラ、シデ、ツノ



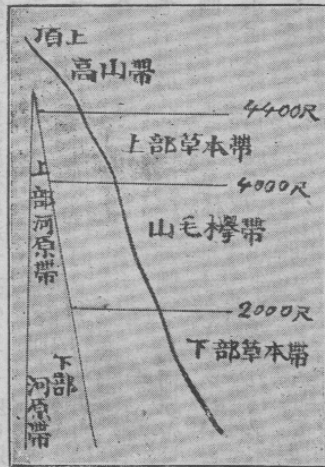
- A ツカサクラ 密生地
 - B イチ非 密生地
 - C ヤマナギ 密生地
 - D ヒメヤシヤブシ 密生地
 - E レンゲツ、シ 密生地
 - F 高山の御花鳥
- ▲ 朝日を見る場所
- ++++ 山毛櫨帯深林
- ++++ 山頂小火口

(大山植物分布平面圖)



ハシバミ、ナツ、バキ、イタヤカヘデ、ハウチハカヘデ、メウリノキ、ウリハダカヘデ、ミヤマハ、ソ、フサザクラ、シナノキ、ヤマバウシ、ミヅキ、ダンコウバイ、ホ、ノキ等の落葉樹林山腹に蟠屈して晝尚暗き状態は平地に於て見るべからざる現象なり。此深林の西端には一小廢社あり、雨を避くるに便なり。此廢社を出つれば、樹木は凡べて小形となり、オホナ

(大山植物分布側面圖)



ラ、ツノハシバミ、ヤマバウシ等あるも矮縮せり。之れ此地は空氣は乾燥し、地盤は濕氣を缺ぎ、風亦襲來すること多きを以てなり。然れども眼界は豁然として廣く、昨日仰き來りし高麗山など脚下にあり、牧原、楨原、樹水原等相指點すべく、西北の方面は限りなく見渡さる。此道路を西々南し、

第一、第二の上部河原帯（上部河原帯とは山巔の禿地を云ふ）を過ぎ、第三の上部河原帯に近つかんとする處に道標あり、高六尺の石柱にして『三十三度供養右こゝなぎ、まぐりと記しあり。登山者は必ず此附近迄進むべし之より一直線に山巔に向つて進めば高山植物の密集地に至るを得べし。今迄の大道と相反して全く道なく、只雜草を排して登るのみなり。而して千四尺の處に至れば西側の上部河原帯にはヒメヤシヤブシ林あり、東側にはヤマヤナギ林あり、ハコツツジ、レンゲツツジなど皆群落して一小灌木林を形成す。之より漸次登れば草木にはマヒヅルサウ、イワカガミ、ヤマオダマキ、シユロサウ等ありて、遂に高山帯に接近するに至る。

大山の寒帯植物

大山の寒帯は其頂上にあらずして凡そ八合目の所にあり。其方面は東北側のみ限り、四千八百尺より凡そ五千尺の間に分布す。此高山帯は山を遶りてあるにあらずして、只東北の一角にあることは一の奇現象なり。特に又其頂上にあらずして、凡そ之より六七百尺も下れる所にあるは不思議と云ふべきなり。蓋し此方面に於ては、秋冬の候常に強く吹き來る所の西北の季候風烈しくして、極寒を示すによればなるべし。夫れ故に他の植物群は到底其發生に適せず、皆枯凋し盡き、只かゝる寒帯的の植物のみ其勢を逞しうしたるものなり。其最も主なる植物は左の如し。

ツガサクラ (石南科)
 イラツ、ツ (同上)
 シラタマノキ (同上)
 子バリノギラン (百合科)

コメバツガサクラ (同上)
 キクバクワガタサウ (唇形科)
 チヤボノセキセウ (同上)
 ヒメアカバナ (茶柳葉科) 火口内にあり

此高山帯の上或は下に相交りて開く花には、「イワカガミ」「コイワカガミ」「オホバノキスミレ」「ヤマオダマキ」あり。「チドリサウ」は其上に紫色の花を抽出す。

大山の如き、高山植物即ち寒帯植物の群集する所は、本州中部以南にては見ることを得ず。著者曾て四國の石槌山（伊豫）劍山（阿波）に登りしが、兩山共七千尺の高度なるにも係はらず、大山の如き高山の石南科植物の密集する所は見ざりき。大山の高山植物は四千四百尺の地より生ず。本多博士に従へば富士山の寒帯は、其下部五千六百尺にして、上部は八千六百尺となり。而して大山は富士山よりは頗る南にあり。概して本州中部にては寒帯植物は六七千尺の處にあるにもかゝらず、大山にてはかくの如く低下す。高山帯にても其下部には多く松柏科植物ありて、

上部には石南科植物あり。大山には高山の松柏科植物は全くなし。余が調査せし所にては、四國の石槌劍等の諸山の中にて、石槌山は四千尺より白檜「ヒメコマツ」出て、白檜帯となる。四國には白檜帯の松柏科植物頗る多きにも係はらず、大山には更になし。只數種の草本は火口帯の上部に見ゆ。蓋し地形の照らしむる所にして、大山の如く本州中央以南に位し日本海上海岸近く聳然として只一峰のみ孤立し他に遮るものなきことも亦其一因ならん。

大山にある高山の御花畑

高山の御花畑所謂ジョルダンの景は、大山にては凡八合目より絶頂にまで分布す。之は高山にては常に見る所の現象にして、實に燦爛目を奪ふ

ものなり。大山にては六月下旬より始まりて九月中旬頃に終る。十月には花落ちて寂寥たり、六月下旬には赤色の「イワカヤミ」紫色の「チドリサウ」黄色の「オホバノキスミレ」「ヤマオダマキ」樺色の「レンジツ、ジ」等咲き亂る。七月八月の交には紫色の「クガイサウ」は鎗の穂の如く赤色の「シヨクフウロ」は之に交り、白色の「サラシナシヤウマ」は刃の如くに光り、「イヌヨモギ」の白葉風に靡きて最も美觀を極むるものなり。此現象は全く平地に於て見るべからざるものにして、何故にかくの如くに花美なるか、又何故にかくの如くに芳香あるものゝみなるか、問はずして知るべし。高山の山巔は氣候悪しければ蜂虻の訪問も稀なり従つて風暖かなるに及びて花一時に開き、しかも比較的開花期も長き必要あるによればなり。



御山の眺望

空氣極めて清澄にして最も明媚に見ゆるは初秋の交なり。即ち九月下旬より十月の間を可とす。盛夏の交は絶頂には時々雲霧あり、屢々晴れては曇り、曇りては又晴る。且空氣中には水蒸氣多くして遠隔の地も靡ろに見ゆ。春も亦山は多く霞を以て鎖されて明快なる眺望なし。されど梅雨の期間若し雨晴れたる曉に晴天續けば、初秋の如くに清澄にして、よく遠望に適す。晴れたる頂上は眼界豁然として水、天に連り、北方日本海の鏡上に眉をひくが如きものは隱岐島なり。島根半島、夜見ヶ濱、中海は脚下にあり。南遙かに四國の諸山雲烟の如くに見ゆ。東方は作の蛭ヶ山、三平山は兜ヶ岳の先鋒に現はれ、徳山の窪地は眼下にあり。只東

伯鳥取地方のみは見えず。西は三瓶山猿路山其山巔のみ現はれ、船通山三郡山、星上山相連りて屏風の如く、能義郡西伯郡の諸群山螺髻の如し。

朝日を見る目的の大山

大山に登山せんとする人には種々あり。旭日を拜せんとの人も亦數多し。かゝる目的の人は豫め早朝月あるの日を選び、大山寺は午前二時乃至三時に起床し、尙提灯をも携へて登るべし。山毛櫛帯の深林は、假令月出づるも暗ければ燈火の用意あるべし。此深林を出づれば、燈火なきも明皎々として道を透進るに便なり。西方第三の上部河原帯に沿うて登ること普通の道に同じきも、只未だ高山帯に達せざる所より道を左に採り、東方に折れて爆裂火口の外壁凡そ五千尺に近き處に至りて旭日を待つべし

頂上にては他の山巔に遮られて日出は見るを得ず。旭日の將さに出てんとする時は、水天髣髴たる所黄紅色の雲霓棚引き、後満面朱の如くになれる陽暉出で、美觀譬ふるに物なし。此朝暎の地平線に上りて漸く照り渡らんとする頃、日本海上遙かに黒色遠山の如きもの見ゆれども、之れ決して山にあらず、數時間の後消散して痕跡だもなきに至る。

大山の杉林と動物

大山寺の境内には老杉の群立するもの數多し。此鬱蒼たる杉樹の景は本邦固有のものにして、外人は常に以て奇觀となし、歎賞措かざる所のものなり。由來社寺の境内にはかゝる杉林は常に見る所なれば、吾人には何等の感を引き起さざるが如きも、實は注意を拂ふ必要あり。殊に比年かく

の如き老杉は益々伐採せらるゝ今日、大山の如き老杉の密林は大に保存すべき價あるものなり。實に此老杉によつて益々千古の感を深くするなり。夏秋の候に方り、若し一陣の風伯襲來するものあらば、此杉葉は爲めに非常なる音をなし、夜間に於ては天地も崩れん計りに聞ゆることあれども、實に意外のこともなく、かゝる時には多く天候は變して翌日には霏々たる霖雨を催すに過ぎず。

老杉風外に聞ゆるものは石泉にして、潺々として絶えず流るゝ音は夜間にては烈しき降雨の如くに聞ゆ、驚きて天際を仰げば星辰輝き渡り、天河亦南樓の上に出て、晴天を證することはかゝる所に常にある現象なり。

大山には異様の動物の分布するものを聞かず。「ヤマ、ユ」「テグスノテフ」「タテハテフ」等翩々として軽く飛ぶ。蟬類には其聲の少しく異なるも

のを聞く。「アシベニ、バツタ」は、廣野に高く飛ぶ。晩春の乳雉は落花の間に叫ぶ。初夏には時々郭公の聲を耳にす。秋には草叢の間屢々蝮あれば注意すべし。猛獸は棲ます。猿は、溪谷の間に其の死體を見しことあれば、或は深林中には多からん。山中最も多きは狡兔にして登山の間より之に逢ふ。驚きて逃ぐるること、石を轉するが如し。

大山の氣候

大山の山腹寺院の周圍は、盛夏の候、日中も亦冷涼を覺ゆ、夜間蚊虻を見ず、避暑には好適地なり。概して深林地は平地と異り、頗る雨量に富む。夫れ故に大山の如き處にては、一朝雨あれば益々寒さを感じ、暖を欲するが如きこと稀ならず。山巔に於ては、早朝は多く濃霧を以て鎖し、

盛夏の候も、午前八九時頃までは頗る寒冷なり。晴天の日には十時頃より溫度高まり、正午より二時頃までは、朝來の冷しきと反對に、非常に苦熱を感じ、堪へ難き思を起さしむ。而して夕陽没する頃に至れば、再び早朝の如き寒さを覺ゆるにより山巔は常に極端なる氣候なり。若し濃霧も亦霧れずして、遂に朝より雨を見るが如きことあらんか、山巔にては必ず風は襲ひ來りて雨具も其用をなさず、雨滴は下方より吹き上げられて、顔面を掠め、絶えず目を拭ひ乍ら道をたざる、其苦云ふべからず。山道も亦濁流混々脛を沒し、よく滑り落ち、汚泥は衣を浸して、疲勞に堪へず、之を以て夏雨の登山は之れを避くるを可なりとす。六月上旬及び十月下旬の頃には、山巔に雨あれば時々雲を齎し手足冷却して寒さ堪へ難し。

大山の詩歌

大山

仁科白谷

大嶽削成三萬丈、絶巔縹緲有無中、雪雹吹散來爲霰、濤聲動地北溟風、

上角盤山

村上嶽翁

兩脚股間跨角盤、盤山六月雪風寒、行雲掃拭遠眸去、雙點隱州彈小丸、

上大山一云角盤山

僧海量

八仙何歲此翱翔、二帝應機起道場、華頂岩圍絶人跡、翠巒林闔列僧房、

石門聳擢通幽處、玉殿縈回踏上方、開土金蓮功不少、傳燈點闇中與山長

有信

天雲のいはゝかる大山は、ふもとの外に鳴鳥もなし、

寛 蔭

大神の高嶺離れて行雲や木梨の里の雨と降るらん、

三 千 風

伯耆不二白砂雪吹て夏もなし、

寸 風

峰にある雪見て違ふ扇哉、

大山の畫題

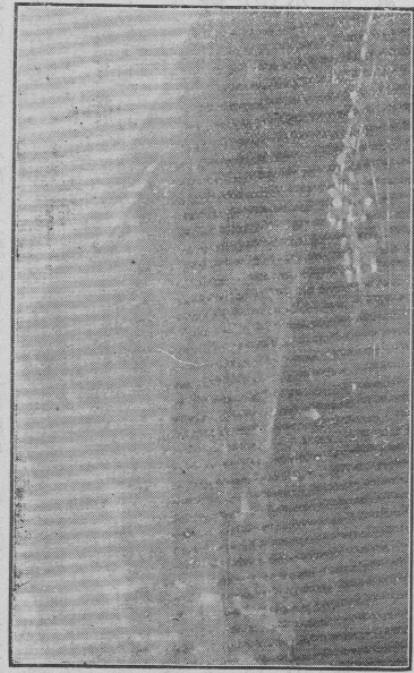
昔は谷文晁筆を携へて東北諸山に寫生旅行をなしたり。夫れ故に文晁の畫はかゝる山毛櫛帯の地にして其集塊岩よりなれる絶景數多し。池野大雅は白山、立山、富士山に登ること屢々にして、彼は署して三岳道者と



大 山 切 割 け の 絶 勝

云ひき。かるが故に大雅の山水は火山的のもの數多し。今大山に登りて之を見るに、始めて古の兩大山水畫家の書題となりしが如き景勢髯として見るべし。即ち常にある文晁の兩崖峭るが如き谿谷の景は「切り分け」に於て見られ、累々として落ちんとするが如き山岳の景は「阿彌陀山」に實見せらる。大雅の筆を握るや、立口にして流麗なる逸筆となりて裾野の山を現はし、又曲折多き外輪山の頂を示す。其間點綴するに山頭辨の皴法鼠足點等を以て山毛樺帶の小密林を作り、輕き米點を以て高山の小灌木林を書く、是實に大山の外輪山に於て實見せらるゝものにして、思ふに其山水たるや、文晁は火山の内部を書き、大雅は其外部に筆を染めたるもの多きが如き感あり。

尾形光琳は、高山に登りしことは之を聞かずと雖、彼が其理想的に濃艶



なる着彩法は花葉美なる高山の御花畑の景に於て見らるゝものにして、
 實に其花葉の濃色なると共に、奇矯の形態を描くもの何ぞ風霜に遭遇し
 て常形を失したる全然高山植物の姿態ならざるなきや、大山は、何れの
 點より之を見るも畫家の好題目として見るべき資質あり。
 實に大山は、植物學上地質學上のみならず、史學上並びに美術上よりも
 登山し研究すべき價ある高山なり。

三瓶山

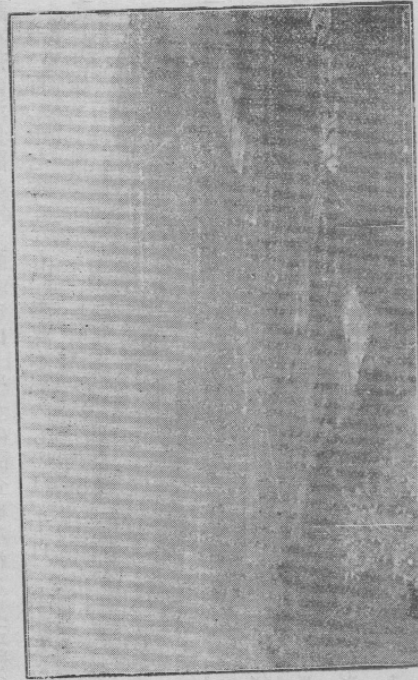
三瓶山調査の歴史

明治二十一年の頃、山上理學士は三瓶山の高度、地形、温泉、噴火の歴史等につきて調査せられ、農商務省地質調査報告に載せられたり。明治二十七年、故大島工學士の三瓶山鳴動の記録あり、又數年前、大學より清野氏來りて同山につきて調査せられしこのことなり。著者も亦、去る明治三十七年の頃より本年までに、四回同山に登り、同山の地質及びその植物分布の關係等につきて、調査するものありき。其地圖として出版に上れるものには、農商務省土性圖あり、同省地質調査圖あり、又參

謀本部の測量圖あり。而して山上學士の調査になれる男三瓶の高度は、一千二百二十七米となし、參謀本部のものは、千二百六十六米となしあり、高度の如きは測量の方法により、多少の差あるものなり。

三瓶山の地形

三瓶山の岩石は、主として雲母頑火石安山岩なり。其高度は、山上學士の調査によれば、男三瓶山は（一千二百二十七米）、女三瓶（九百五十米）子三瓶（九百六十米）、孫三瓶（八百七十米）、太平山（八百十米）、室内峠（七百九十米）の高さにして、温泉源へ志學よりすれば八町あり、之より登ること二十町にして室内峠に達す。舊火口内には一大窪地あり、之を室の内と云ふ、東西九町、南北十二町なり、其の右に一小池あり、室の



内池と云ふ、室内峙より百米許（道の距離）下にありて、廣さ數畝なり、頗る淺きも、其の太平山に接する處は稍深きが如し、要するに三瓶山は前記五山一峙よりなり、東西には大なる裾野を有し、西の裾野には浮布池あり。

三瓶山噴火及び變動の歴史

出雲風土紀によれば、八東水臣津命、雲國の地形狹長なるを見、新羅土の一部を引き、出雲北部に加へ御崎となし、其新土の安定を欲し、杭して之を繋ぐ、此の杭化して三瓶山となりしと。傳へ云ふ。天武帝の御宇、白鳳十三年甲申十月、地、震動して山三分し、男、女、孫の三山を作り、同時に池沼出て、浮沼池（今の浮布池）となりしと。此時又山腹より

三個の瓶を吐き出し、一は物部神社にあり、一は浮布池に沈み、一は西麓なる小池に没したり、依つて之を三瓶山と稱したりと。他に同山に係る歴史的事實の記録を見ざれば、左に地質調査書に載れるものを擧げて、近年の記事を示す。

三瓶山は歴史以來比較的靜穩なる火山なりしが如きも、併し今日にては噴出瓦斯の状態、温泉温度の變化等尙火山活動の餘力あることを示すものにして、即ち元志學温泉の温度低くして入浴する能はざりしも、明治五年石見大震後より、俄然温度を高めて今日に至りしこと、巨智部博士の地學雜誌三卷に載れるものに明なり、而して尙逐年上昇の傾向ありと言ふ。

明治五年石見震災の時、孫三瓶、南方山腹一大地にありき、

巨智部博士は、明治二十一年十一月二日夜、松江に於て、同七日の夜は掛合に於て、遠雷の如き地響を聞かれしと、併し之は三瓶のものなるや否やは不明なり。

明治二十六年、三瓶地體地之を生し、ために附近鳴動し、温泉源地に雪崩を生じたりと。

大島工學士は、大森銀山に於て、三瓶山鳴動の日記あり左の如し

二十六年六月八日午前九時三十分

同十二月三日午前一時

二十七年三月二日午前七時

同七月十八日午前十時

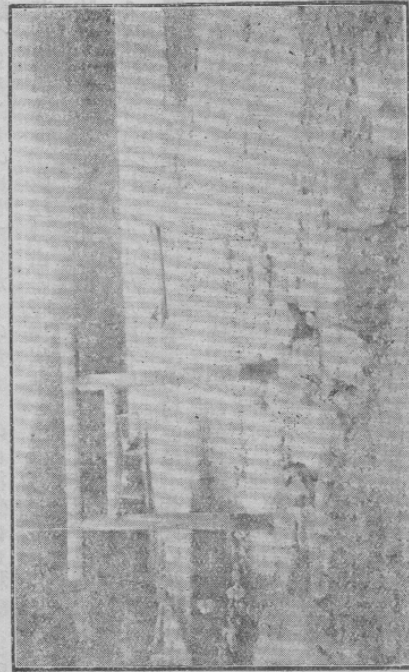
同八月十四日午前五時三十分

又鳥の地獄は數年前より其の勢を減じ、噴出面稍小となれり。以上の事實を綜合すれば、三瓶山地體の最弱點は、泉源地より鳥地獄の線をつらねたる、孫三瓶の一帯の地にありと稱して可ならん。

三瓶山の噴出と其周圍地貌の關係

山岳には數種あり、火山、皺襞山、斷層山、浸蝕山等之なり。出雲及石見の南平部は、蓋其初め高原性の花崗岩地にして、凡そ一千米内外の高度ありしならん、之は只だ本縣のみならず、中國の脊梁山脈は皆然るが如し、然るに年月を経過するに従ひ、流水の浸蝕消磨行はれ、特に花崗岩中其の組織の粗鬆なるものは、風化作用を蒙ること頗る早く、遂に崩壞して流去せられ、豁谷となり、後に残れる岩骨は、即ち山として今日

數へらるゝものにして、かくの如きものは浸蝕山と稱す。三瓶火山帯は其噴出により、此浸蝕山の花崗岩地を兩斷したるものなり、而して噴出物は、出雲にては簸川、飯石、石見にては安濃、邑智の大部分を掩ひたるものなり、之れ等火山灰及浮石層は、前記花崗岩山地の上に布きたり、實に池田、小屋原、山口、志學等の村邑は、皆此の火山灰たる凝灰岩層の上に建設せられたるものなり、夫れ故に三瓶山の基礎は、雲石の兩地にては、全く花崗岩にして、附近河合村其他にて實見せらる、かゝる例は多くの他の火山にもあり、木曾の御嶽も亦下底は花崗岩なり、加賀の白山は水成岩、信州淺間山、碓氷峠に水成岩出づ、而して之等の噴出岩は、其の噴出するに當りてや、地下にては周圍の岩石と相接し、岩石は熱せして接觸變質を起し、茲に各種の鑛物を生成するものなり、地上に



ては、一時に突兀たる倒扇状の山岳を聳らしむると同時に、火山灰熔岩等は其の周圍に堆積して、人畜を埋め、河道を遮りて、忽ち堰塞湖を生ずる場合頗る多し。

彼の三瓶西麓の浮布池は、かくの如くにして火山灰の堆積によりてなれる堰塞湖に外ならず。日光中禪寺湖は、男體山の熔岩、華嚴に流れ、諏訪湖は八ヶ岳の熔岩流、河道を塞ぎて、何れも大なる堰塞湖をなせるものなり。

三瓶火山の構造

三瓶火山は、その東西に廣漠たる裾野を抱く、此の裾野は火山灰の堆積せること、前述の如し土質は軟鬆にして傾斜少なく、所々に流水のため

に著しく凹所を生じて、低き放散谷をなせりかくの如き形式は、何れの火山も之を認むるを得るなり。裾野の盡頭俄かに傾斜急なる所は、之れ集塊岩の累層にして、山頂は此の上に溶岩固結したるもの、簷然として高く、所謂成層火山の名ある所以なり男三瓶山にては頂上平坦にして、風化作用よく行はるるも、土壤淺ければ、樹木は繁茂せず、只禾本科の大草本のみ數多發生せり、山腹の傾斜急なる所は、土砂流出し去りて、岩骨を露出するにより、小草本のみ發生せり。

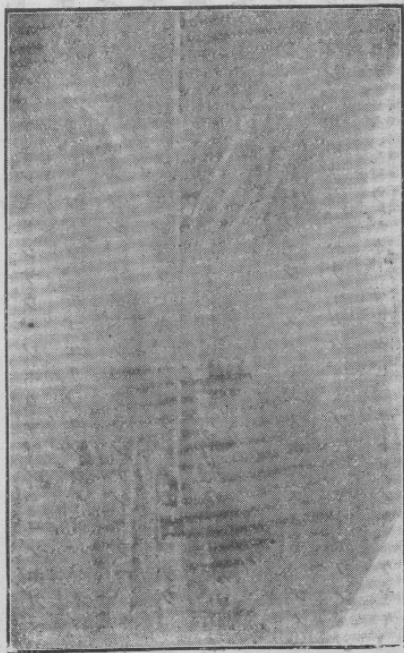
富士火山研究に造詣深き、平林學士は、我が國に於ける火山の構造を調査して、火道は放散状になれることを示し。而して火山灰と集塊岩とは、恰も樹幹の如く層をなせることを述べ。火道は髓及び射出髓に比すべく、その間に於ける凝灰岩、集塊岩は、木質部の年輪に似て層をなし、熔岩

は即ちその外皮を造れるものなるべしと云へり。三瓶火山の構造も、蓋し之に近似せるものあらん。

前述の如き熔岩塊よりなれる男三瓶、女三瓶、孫三瓶等は、凡べて外輪山にして、室内池は、舊火口原に瀦溜せる火口原湖なり。
鳥の地獄は、今や只だ熔岩の大塊散在するのみなるも、其當初に於ては、火口丘を造りしものなるべく、其殘存せる熔岩塊の周圍には、固と火山灰、集塊岩ありしものなるも、同所は室内池よりは稍高き所にあるを以て、年月の久しき流水のため、附近の砂礫は流下し盡したるものなるべし。明治四十四年十月登山の際、石灰水を持參し「スホイド」内に吸入せる此發生瓦斯を注ぎしに、白色の沈澱物を生じたり、即ち炭酸石灰の生じたること明かなれば、瓦斯は炭酸なること疑ひなし。

三瓶火山地質と植物分布の關係

地質と植物の分布とは密接なる關係を有す。況や火山の噴出物は、普通の岩石土壤と相違すること多きに於てれや、特に三瓶は、日本全部の地
形より觀察すれば、寧ろ海岸近く嶄然として峙ちたる日本海沿岸の盟主
たるの觀あり、依て試に左の三帶につきて畧説すべし。
火山灰と草本帶、火山灰は透水性強く、常に乾燥するにより、樹木及び
蔭地の植物の發生に不適當なり、此の故に乾性の草本密生す左の如し。
ヤマボクチ、オトギリサウ、センノウ、フシクロセンノ、ヒアフギ、
シコクフウロ、マツムシサウ、ウメバチサウ、ウシクサ、アキナへ、オ
キナクサ、ヒトツバヨモギ、オトコヨモギ、イヌヨモギ、ノビル、オグ



獄地の鳥及池の口火噴

ルマ、カウヅリナ、シホデ、オミナヘシ、オトコヘシ、キツネアザミ、トダシバ、アキノキリンサウ、シホカマギク、コシホガマ、ミシマサイゴ、センブリ、リンドウ、チゴユリ、コウライシバ、オバナ、チカラシバ、キハギ、ギバウシ、イタドリ、サラシナシヤウマ、トリアシシヤウマ、オニアザミ、キンミヅヒキ、ノダケ、カラマツサウ

集塊岩と山毛櫛帯、集塊岩の地は、貯水力強きにより、山毛櫛帯植物數多發生す左の如し。

ハコツ、ジ、レンゲツ、ジ、スノキ、オホバスノキ、ツノハシバミ、ヤシヤブシ、オホナラ、ハナイカタ、ミヅキ、ヤマボウシ、シデ、カツラ、クロモヂ、ダンコウバイ、マタタビ、チドリノキ、ケヤキ、ノリノキ、ハリキリ、フジキ、ミヤマハンノキ、カシハ、ヤマヤナギ、ニシキウツギ

火口内は、全く此の山毛櫛帯よりなれり、蓋し陰濕の地にして、樹林の生育に適するに基くものなり、火口原には多數の『カシハ』密生するは、他に多く見ざる現象なり。

熔岩と高山帯 熔岩はその頂上凡そ八合目よりあらはる、山の高度より之を見れば、茲に高山帯植物の發生を見るべき理由なれども、由來三瓶は突兀として山陰の西端に聳ゆ、他の峻峯の遮るもの更になく、ために秋冬の交には、西北風、強く吹き來り、普通の植物の發生に適せず、依つて東北に面する熔岩角には「シラタマノ木」の如き、高山的植物僅かに發生す、又舊火口の絶壁には「キクバクハガタサウ」見らる、蓋し大山火山の影響を受けたるものなり。

三瓶山の噴火

火山の大破裂をなすや、必ず熔岩流と浮石塊とを其火口より噴出するものなり。明治年間の火山破裂は、此の熔岩流はなく、主として火山灰を以てしたり、熔岩流の出でしもの、富士には幾回もあり、特に甲斐の猿橋驛に至りしもの、如きは、其著しきものなり、淺間には天明年間流出し、櫻島の如きも流れて燃岬となり、肥前温泉岳、羽後鳥海山、陸奥岩木山、加賀白山、陸中の岩手山の如き、何れも瞭然たる熔岩流あり、然るに三瓶火山にありては、從來此の如き熔岩流はなかりしが如く、火口より溢出したる形跡もなく、又山腹より流下せし痕跡も見えず、只だ浮石はその周圍に多量に堆積し特に廣島街道には累々として存す、蓋しこ

の浮石は、三瓶山形成の後、再び噴出したるものなるべし、されど曾ては一大噴出をなしたるものなることは、其火口の大なるによりても窺知するを得るなり。今日鳥の地獄として、一隅に残れるものは、實に舊時を想像するに足るべき遺物に過ぎざるものなり。

三瓶山の噴出したる時代は、多少文献の徴するものありて、數回噴出したるもの、如きも、其初て噴出したる時代は、頗る古きものなるが如し、之は山の形式にて證することを得べし、思ふに形式整然たるものは、噴火時代の比較的新しきを示すものにして、時代を経るに従ひ、風化浸蝕の作用並び行はれて、山體は漸次崩壊せらるゝに至るものなり、三瓶山は其初めに於ては、形式整然たりしものならんも、星霜を積むこと長く遂に今日の如く、數山相鼎立して、瓶狀をなせるものなるべく、之を富

士、岩手、櫻島の美しく倒扇状なるに比ぶれば、確かに後者は三瓶より新しきこと疑なきなり。三瓶山は今日殆んど休火山中に數へたき活火山なり、而して若し之を活火山中に入るれば、其末期たるや言を要せず、併し乍ら、噴火は自然現象にして、人力の豫想し得べきにあらず、末期なりとて、何時噴火現象あらんも計り難し、彼の盤梯山の實例の近き過去に實現せられしものあるに鑑みるべきなり。

火山の種類

火山には從來詳説し來りしが如き成層火山の外に、塊状火山なるものあり、之は熔岩のみ地上に噴出せられ、固結して圓形をなしたるものにして、火口等は更になく、約ね低く且つ小にして著しからず、三河鳳來寺

山、大和畝傍山、春日山、讃岐象頭山、常陸筑波山は之なり。又岩脈なるものあり、所々に出で、岩塊を貫き、板の如くに地中に固結す、かくの如きもの、後に至りて水蝕作用を蒙り、周圍の土砂は流出せられて岩脈のみ残り、奇景を呈するもの少からず、火山地方に多き安山岩片よりなれる集塊岩の如きは、甚だ浸蝕せられ易き岩石なるが故に、かゝる地方にも亦奇偉なる風景をなすもの數多し、立久恵、耶馬溪の如き即ち之なり。

火山は本邦に二百有餘あり、此の内活火山として數へられあるもの六十なり、併し乍ら、死火山活火山の名稱は、全く人爲的の區別に外ならざれば、休火山と雖も何時噴火して活火山となるやは計るべからざること前陳の如し。

重炭酸マグネシウム	〇、三五四〇
重炭酸亞酸化鐵	〇、〇二二二
硅酸	〇、一五九〇
遊離炭酸	〇、五九三二
硼酸	微量
礬土	痕跡

志學の温泉は同火山々麓にありて、高さ六尺圓形の洞穴より滾々として流れ、一々引きて浴場に導き、他は流れて川となる。別に又炭酸泉の出づるあり、浴場の槽中に堆積する灰白色沈澱物は即ち硅華にして、志學宮本氏の示せるものは、其の厚さ凡そ八分五厘ありて、二ケ年を要したるなるべしと、かく硅華の堆積する現象は、即ち多くの鑛物の成因を目前に表示する所以にして、金屬鑛物は其初大概かくの如くして地下水に

溶解せられ、岩石の罅隙中に入り、沈澱或は結晶して生じたるものなり。

重炭酸マグネシウム

〇、三五四〇

大山の三昧

審判官の身、貴人の御用に入る。此書は海内特異な了主の口をよみしもの。

大正三年九月三日印刷
大正三年九月八日發行

編輯者 八東郡法吉村大字黒田 雪 吹 敏 光
 發行者 松江市天神四十番地 秦 慶 之 助
 印刷者 松江市雜賀八番地 三 島 藏 市
 印刷所 松江市殿町三百八十三番地 松 陽 新 報 社

電話 (長) 三三三番
 (長) 三六九番
 振替貯金大阪二〇六七〇番